

## *Julius Caesar*における“know”

松浦美佐子

### 1. 序

William Shakespeare の *Julius Caesar* は、人の認識、特に誤認や誤解を主題とする劇のひとつである。それは次の Cicero の台詞にも明らかである。Caesar 暗殺の前夜、激しい嵐を凶事の前兆と恐れる Casca の態度を、Cicero は、人とは「自分流に物事を解釈し、本来の意味とはかけ離れたとりかたをする」<sup>1)</sup> ものであると評する。

But men may construe things after their fashion  
Clean from the purpose of the things themselves. (1.3.34-35)

ここに示された人の認識に対する懐疑は、劇を通して繰り返し提示される問題である。Brutus や Cassius の手前勝手な思い込みは、彼らを破滅に導く。Caesar も読みを誤り、暗殺者の手にかかる。彼らに共通するのは「知っている」という思い込みである。しかし、*Julius Caesar* に描かれるのはそのような誤認や曲解の問題だけではない。Barbara J. Baines (140) の指摘にもあるが、同時に、「本来の意味」を見極める能力の探求も試みられており、*Julius Caesar* から *Hamlet* への Shakespeare の劇世界の進展を見るうえで興味深い。

本論の目的は、*Julius Caesar* における「知っている」という思い込みと「本来の意味」を認識する能力がどのように描かれているか、作品の言語分析を通して明らかにすることである。特に、動詞“know”を取り上げ、その分布と用法の特徴を記述しながら、それが作品世界の構築にどのように寄与しているのか論じていく。

### 2. 「知ること」の言語表現としての“know”

*Julius Caesar* にはメタ認知的表現<sup>2)</sup>が頻出するが、その一つが“know”である。*The First Folio* における“know”の使用頻度は、<sup>3)</sup> *Julius Caesar* で 70 回を数えるが、これは、*King Lear* 81 回、*Othello* 72 回、*Hamlet* 71 回に続く 4 番目の高頻度である。

これら“know”が頻出する作品に共通するのは、「知ること」への強迫的な願望と必要性である。例えば、*Hamlet* は父の死の真相を求め、*Othello* は妻の不貞の確証を求める。また、*King Lear* は信じていた者に裏切られ全てを失ったのち、己が何者であるかに向き合わねばならない。*Othello* も異邦人として常に自己のアイデンティティの問題に悩まされる。

*Julius Caesar* においても、「知ること」は劇のテーマの一つである。しかし、*Hamlet* や *Othello* において「真実を知る」欲求が悲劇を展開させるのに対して、*Julius Caesar* では「知

っている」という思い込みが悲劇を進めていく。Hamlet や Othello とは異なり、Brutus も Cassius も「真実を知る」ことを求めない。それどころか、現実を思い込みと取り違え、対処を誤ることを繰り返す。Hamlet, Othello, King Lear そして Julius Caesar において、動詞“know”の頻出は共通するが、それぞれの作品で掘り下げられる「知ること」の問題は異なっているようである。

さて、Julius Caesar における“know”の分布を、場面ごと、主な登場人物ごとに示すと、以下の表 1、表 2 のようになる。ここでは“know”だけでなく“know’st”“knows”“knew”“known”“unknown”などの派生形も含めた。その結果、特に頻出する場面は 1 幕 3 場 (Cassius が Casca を説得する場面)、2 幕 1 場 (Brutus の自己正当化、Cassius の Brutus 説得、Portia の Brutus 説得の場面)、3 幕 1 番 (Caesar 暗殺の場面)、3 幕 2 場 (Antony の追悼演説の場面) となる。また、登場人物別では、最多は Cassius の 28 例、続いて Brutus 17 例、Antony 14 例となる。誰に対して使用されているのかでは、Cassius から Brutus へ 14 例、Antony から市民へ 12 例、Cassius から Casca へ及び Brutus から Cassius へが同数の 9 例となる。

表 1. “Know”の使用頻度：幕・場

| Act 1   |    | Act 2   |    | Act 3   |    | Act 4   |   | Act 5   |   |
|---------|----|---------|----|---------|----|---------|---|---------|---|
| Scene 1 | 3  | Scene 1 | 10 | Scene 1 | 12 | Scene 1 | 0 | Scene 1 | 7 |
| Scene 2 | 8  | Scene 2 | 4  | Scene 2 | 12 | Scene 2 | 1 | Scene 2 | 0 |
| Scene 3 | 11 | Scene 3 | 0  | Scene 3 | 0  | Scene 3 | 7 | Scene 3 | 0 |
|         |    | Scene 4 | 2  |         |    |         |   | Scene 4 | 1 |
|         |    |         |    |         |    |         |   | Scene 5 | 2 |

表 2. “Know”の使用頻度：主要登場人物

|           |    |            |    |              |    |                 |   |               |   |
|-----------|----|------------|----|--------------|----|-----------------|---|---------------|---|
| Cassius   | 28 | Brutus     | 17 | Antony       | 14 | Caesar          | 5 | Portia        | 5 |
| to Brutus | 14 | to Cassius | 9  | to plebeians | 12 | to Brutus, etc. | 3 | to Brutus     | 4 |
| to Casca  | 9  | to himself | 2  | to others    | 2  | to others       | 2 | to soothsayer | 1 |
| to others | 5  | to others  | 6  |              |    |                 |   |               |   |

\* 表 1, 2 とも、“know”だけでなく“know’st”“known”などの派生形も含む

### 3. 動詞“know”の意味と用法

Julius Caesar について論じる前に、“know”の意味・機能についての語用論的見解を紹介する。Stephen C. Levinson は、“know”と“believe”に続く補文の意味論的含意を比較し、その推意の確実性・不確実性を示した。彼の論を Cassius の台詞を用いて説明する。以下の、(a)は、Cassius が Brutus を Caesar 暗殺に引き入れんと説得にかかる場面の台詞の一部である。(b)は、(a)の“know”を“believe”に変えたものである。Levinson の論に従って、両者の補文の含意を比較すると、以下ようになる。

- (a) You know you cannot see yourself.  
(b) You believe you cannot see yourself. (以下、下線は筆者)

(a) では、補文の意味論的含意は、自分の姿は見るできないと Brutus には「わかっている」となるが、(b)の自分の姿を見るできないと「思っている」という文では、Brutus の考えは、自分の姿を見ることはできないかもしれないし、できるかもしれないと推意される。Levinson はこの違いを、“know” はより強い推意を、“believe” はより弱い推意を生み出すと説明する (110)。“Know” の他に、補文が真か偽かを含意する強い動詞群には、“realize” “reveal” “disclose” “divulge” “disprove” “refute” などが、また、補文が真偽を含意しない弱い動詞群には、“believe” の他に、“think” “claim” “say” “deny” “reject”などが挙げられる (111)。

以下では、“know” の使用を場面ごと、登場人物ごとに分析していく。“Know” の統語構造や語用論的意味・機能を考慮しながら、“know” の使用が、劇中人物の認識のテーマをどのように展開させているのか検討する。

### 1) 1幕1場における “know” の役割

*Julius Caesar* の冒頭の “know” は、「知らないのか」という否定疑問文で始まる。*Hamlet* と同様、1幕1場に主要な登場人物は登場せず、周辺のな人物によって劇世界を形成する基本情報が提示される。以下の動詞 “know” を伴う文には、内乱に勝利した Caesar の凱旋パレード、Pompey の敗北、Lupercal の祭日などの状況説明が提示される。

What, know you not, (1.1.2) / Knew you not Pompey? (1.1.36) / You know it is the feast of Lupercal. (1.1.66)

特に、否定疑問文の使用は、話者の Caesar への反感、Pompey を忘れ Caesar をもてはやす大衆の移ろいやすさへの苦々しさなど、今後の展開を予兆する不穏な空気を伝えている。

### 2) Cassius の “know” : “you know” と “I know” の区別

Cassius は誰よりも多く、特に、他者を説得する場面で “know” を使用する。彼の使用する “know” には、彼の他者への態度のみならず、彼の性格上の弱点が読み取れるようになっていく。まず、Cassius の他者への態度の違いを “know” の使用分布<sup>4)</sup>から見ると、Brutus に対して用いる “know” 14 例の内、一人称主語を取るものは 5 例、二人称主語は 7 例を数える。一方、Casca に対する 9 例では、一人称主語が 6 例、二人称主語が 1 例となる。

それでは、Brutus に対する説得では、なぜ “you know” が優勢となったのであろうか。

And since you know you cannot see yourself

So well as by reflection, I, your glass,  
Will modestly discover to yourself  
That of yourself which you yet know not of. (1.2.67-70)

“You know”には相手との心理的距離を縮め、共感を高める効果がある。ここで Cassius は、Brutus の正しい自己認識には Cassius という鏡が欠かせないと述べるのに “you know” を付加し、彼と Brutus が同じ考えを共有しているかのように見せる。また、次例の “you know” では、相手に判断をゆだね、相手の自己説得を促す効果が期待されている。

If you know

That I do fawn on men and hug them hard  
And after scandal them, or if you know  
That I profess myself in banqueting  
To all the rout, then hold me dangerous. (1.2.74-78)

ここで Cassius は「みさかいなしに、ご機嫌を取る男」や「陰で悪口を言う男」という自己像を提示するが、それを敢えて自分では否定せず、“if you know”によって Brutus にその真偽の判定をゆだねる。一方、Brutus は、無意識のうちに否定的 Cassius 像を否定し、肯定的評価をするよう導かれる。つまり、“you know”によって、相手との共感形成とともに、相手の判断を尊重する態度を示しながら、相手の思考を特定の方向に導くことも可能となる。

しかし、話題が Caesar 暗殺に転じると、Cassius は一貫して “I know” を選択する。

I know that virtue to be in you, Brutus,  
As well as I do know your outward favour. (1.2.90-91)

これは Casca に対する説得の場面でより顕著になる。Cassius は、Casca に対しては Brutus にするような配慮は示さず、一方的に Caesar 暗殺への強い決意を語り続ける。自死をも辞さない決意、圧政を払いのける心意気を知らしめんという願い、ローマ人の不甲斐なさへの憤り、自分の言葉に責任を持つ決意を語る中で、Cassius は一貫して “I know” を用いる。

I know where I will wear this dagger then:  
Cassius from bondage will deliver Cassius. (1.3.89-90)

But life, being weary of these worldly bars,  
Never lacks power to dismiss itself.  
If I know this, know all the world besides,

That part of tyranny that I do bear  
I can shake off at pleasure. (1.3.96-100)

Poor man, I know he would not be a wolf  
But that he sees the Romans are but sheep; (1.3.104-5)

I perhaps speak this  
Before a willing bondman, then I know  
My answer must be made. But I am armed,  
And my dangers are to me indifferent. (1.3.112-15)

この一連の“I know”の反復には、CassiusのCascaを軽んじる態度、Cascaに対しては意見を一方的に押し付けてかまわないという意識が示されている。

しかし、ここに示唆されるそれ以上に深刻な問題は、Cassiusの自己認識のそれであろう。Cassiusの“I know”の繰り返しは、実は彼は何も分かっていないのではないか、という疑問を生じさせる。彼の言葉にあふれる自信と確信は、実は見せかけに過ぎないのではないか、むしろ、彼はCaesar暗殺という荷重な企てに押しつぶされそうなのではないか、自信のなさをごまかすため、彼はわかっている振りをしているのではないか。このような過剰なまでの“I know”の繰り返しは、Cassiusの精神的脆さや劣等感、さらに、それを認められない彼の自己認識の問題を浮かび上がらせる。

さらに、続く場面での“I know”の反復には、より明瞭に彼の精神的脆さが描き出される。共和政守護の決意を熱く語ったCassiusだが、その後、話題を転じたのちも“I know”の使用を止めることができない。下の引用のように、Pompey劇場で待つ仲間のこと、また、Cinnaの歩き方など、些細な事柄についても“I do know”の使用が止まらない。

And I do know by this they stay for me  
In Pompey's Porch. (1.3.125-26)

'Tis Cinna, I do know him by his gait. (1.3.132)

この何気ない反復に、Cassiusの感情の抑制のなさや彼の器量の程が見て取れる。Caesar暗殺は彼には荷が重すぎる企てであり、過剰に自己を奮い立たせなければ立ち向かうことができない。それゆえ、Caesar暗殺を語った興奮の余韻も容易には冷めず、不用意に“I do know”を連発することになる。

### 3) Brutus の “know”

Cassius の “I know” の反復は、直後の Brutus の自己正当化の場面にも伝染する。そこで Brutus は彼の知る Caesar について思いめぐらすが、殺害すべき正当な理由が見いだせない。

I know no personal cause to spurn at him (2.1.11)

And to speak truth of Caesar,

I have not known when his affection swayed

More than his reason. (2.1.19-21)

それゆえ、Brutus は、彼の知る Caesar 像から離れ、暴君になりうる Caesar 像を妄想する：“So Caesar may. / Then lest he may, prevent.” (2.1.27-28)。

これ以後、Brutus は、物事の本質から離れ、判断を誤るようになる。彼の “I know” は、現実の真偽に関係なく、ただ彼の妄想のなかの真実を導いているに過ぎない。次の場面でも、“I know” と言いながら、和解を求める Antony の見せかけの友情を真の友情と取り違える。

BRUTUS I know that we shall have him well to friend.

CASSIUS I wish we may. But yet have I a mind

That fears him much, and my misgiving still

Falls shrewdly to the purpose. (3.1.143-146)

一方、Antony への対処において、ものごとの本質を捉えたのは、Cassius の “fear” である。<sup>5)</sup>

You know not what you do. Do not consent

That Antony speak in his funeral.

Know you how much the people may be moved

By that which he will utter? (3.1.232-35)

しかし、“fear” に基づく直観的な判断は、Brutus には受け入れられない。これは Cassius の Brutus への態度も一因となっている。先に Cassius は Caesar 暗殺に Brutus を引き入れるため、ものごとの判断を彼にゆだねる説得手法を用いた。その結果、Cassius が正しくとも、Brutus は自分の判断を優先するようになった。一方の Cassius も、“I know” と自己主張すべきところで、Brutus への遠慮からか、二人称主語の否定文や疑問文の形でしか反論できない。

### 4) Portia の “I should know”

Brutus が現実認識から遠ざかる一方で、彼の妻 Portia は、妻の地位にかけ「知らなければ

ならない」と「知ること」を繰り返す求める。彼女の台詞においてのみ“know”は“should / ought to”と共に、彼女の「知ること」への強い執着を示す。

You have some sick offence with your mind,  
Which by the right and virtue of my place  
I ought to know of. (2.1.268-70)

Within the bond of marriage, tell me, Brutus,  
Is it expected I should know no secrets  
That appertain to you? (2.1.280-82)

If this were true, then should I know this secret. (2.1.291)

しかし、秘密を知った後、彼女はその重みに耐えかねる。彼女はそれを女の心のせいにするが、その思い悩む姿には不必要に知ってしまった者の苦しみが描かれる。

PORTIA Why, know'st thou any harm's intended towards him?  
SOOTHSAYER None that I know will be, much that I fear may chance.  
(2.4.31-32)

Caesar 暗殺直前の場面で、Portia は占い師に問いかけるのに、Levinson の言うところの“believe”や“think”といった補文の真偽を含意しない動詞ではなく、補文の真偽を含意する“know”を選択する。これが“think'st thou”であれば、Caesar 殺害の企ては「あるのかわからない」という含意となったが、“know'st thou”としたことで、企ては「ある」と含意されてしまう。すなわち、この“know”の選択は、秘密の重みに耐えかね、知らず知らずのうちにそれを漏らしてしまう Portia の心理状態まで描き出しているのである。

「知ること」を求め過ぎ、それに押しつぶされた Portia の存在は、「知ること」に背を向け滅びていく夫 Brutus と対をなす。ものごとの「本来の意味」から遠ざかる者だけでなく、不必要に近づきすぎる者も滅びるのである。

### 5) Antony の “know” : “I know” から “you know”へ

Brutus に比べ Antony はより現実的策士で、自分が相手にする Brutus についても聴衆についてもよく理解している。3 幕 2 場、Caesar 追悼演説において Antony は巧みに聴衆を操作し、彼らの心を Brutus らから引き離し、自分の味方とするが、その過程で“know”は聴衆の心を操る戦術の一つとなる。

まず、演説の前半、敵対的な聴衆に向かう Antony は、“here I am to speak what I do know.”

(3.2.93) と、一人称で “know” を用いて、Caesar について語り始める。しかし、Brutus と Cassius が高潔の士であること、Caesar の血染めのマント、Caesar と Brutus の関係など語るうちに、一人称から二人称の「諸君も知ること」へと変化する。

I should do Brutus wrong and Cassius wrong,  
Who (you all know) are honourable men. (3.2.115-16)

You all do know this mantle. I remember  
The first time ever Caesar put it on,  
'Twas on a summer's evening, in his tent,  
That day he overcame the Nervii. (3.2.161-64)

For Brutus, as you know, was Caesar's angel. (3.2.172)

このように、Antony は聴衆に既知の事実を提示することで、巧みに聴衆との心理的距離を縮めていく。その過程で繰り返される “you know” は、時に “do” や “all” によって強調され、Antony と聴衆の記憶の共有を強化する。さらに、Antony 個人の記憶（Caesar が初めてこのマントを着たのはネルヴィー族を打ち破った日であったこと）も、聴衆との共有記憶へと付加され、両者の心理的結び付きをより堅固なものとする。

さらに、Antony は Caesar の遺言状を手 “you know not” と、聴衆が「知らないこと」を強調して聴衆の心を引きつける。

It is not meet you know how Caesar loved you: (3.2.133) / 'Tis good you know not that you are his heirs, (3.2.137) / Why, friends, you go to do you know not what. (3.2.225) / Alas, you know not! I must tell you then: (3.2.227)

その一方で、Antony は巧みに Brutus ら暗殺者との距離をおく。Brutus らとの立場の違いを明確にするのに、否定の “I know not” が用いられ、その後、すぐに、市民たちには “you know me” と語り掛け、心理的結び付きの強化が図られる。

What private griefs they have, alas, I know not,  
That made them do it. (3.2.203-4)

But – as you know me all—a plain blunt man  
That love my friend, and that they know full well  
That gave me public leave to speak of him. (3.2.208-10)



聴衆の心を捉えた Antony は、“I tell you that which you yourselves do know,” (3.2.214) とまとめる。演説の初めでは「私の知っていること」を語ると述べていたのが、最終的には「諸君自身のすでに知っていること」へと変化する。この一人称から二人称への変化は、Antony が市民の心を勝ち得た確信の表れである。

## 6) 命令法の “know”

ここまで主要な登場人物別に “know” の用法を検討してきたが、ここからは構造的な特徴に注目し “know” を分析する。まず、命令法の “know” を見てみよう。Julius Caesar に 4 例しかない命令法の “know” は、それぞれ劇の主題や登場人物の性格描写に深く関わるが、中でも、Caesar のそれは、彼の自己認識の何たるかを示すものとなっている。

Know Caesar doth not wrong, nor without cause

Will he be satisfied.

(3.1.47-48)

これは、暗殺直前、Metellus の請願を拒絶した Caesar が、Caesar とは「不当に人を罰したりはせぬ、またいわれもなく許したりもせぬ」と表明するものである。Caesar は劇中ただ一人、説得的な言語を用いない。上の例は構造的には命令法であるが、聞き手を説得するため発せられたものではなく、ただ Caesar とは何者であるかを断定したものである。<sup>6)</sup> 特に、“know” の行頭の位置が、Caesar の言葉をより力強いものにする。次の Cassius の命令法の “know” は、行頭の “If I know this” によって和らげられ、Caesar の例にある先鋭さに欠ける。

If I know this, know all the world besides,

That part of tyranny that I do bear

I can shake off at pleasure.

(1.3.98-100)

最後の命令法は、Lucilius が Brutus の影武者として名乗りを上げる “Know me for Brutus!” (5.4.8) である。これは周辺の登場人物の台詞においても、劇の主題である認識への懐疑と関連して “know” が使用される例である。本当の Brutus を知らない兵士にとっては、Brutus と名乗る Lucilius は Brutus である。この影武者と Brutus との取り違えには、「知る」ことの恣意性が示される。「知る」とは真実とは無関係な、言葉によって操作可能な行為なのである。

## 7) 5 幕の “know” : “I know” から “known” へ

5 幕 1 場には、Brutus の心境の変化を示す “know” が出現する。それらは、Antony との決戦を前に、Cassius に別れを告げた直後の Brutus の以下の台詞にある。

Why then, lead on. O, that a man might know  
The end of this day's business ere it come!  
But it sufficeth that the day will end,  
And then the end is known. Come ho, away! (5.1.122-25)

まず一つは、“know” と “might” が共起する例で、Brutus の「知りたい」という願いが描かれる。ここまで Brutus はものごとの本来の意味を知ろうとはせず、“I know” と言っては、自分勝手な解釈をして、判断を誤り続けていた。しかし、決戦を前に、Brutus はその日の戦の結果を知りたいと願う。Brutus が何かを「知りたい」と願って “know” を用いるのはこれが初めてだが、「知りたい」とは、この世には「わからないこと」があるという認識の萌芽である。

また、もう一つは、受動態で使用される “known” である。<sup>7)</sup> 5 幕 1 場、最終行の “the end is known” において、Brutus は、「やがて今日一日も終わるだろう、終われば結果も分かるだろう」と、「わからないこと」の存在を受け入れる。その意味で、この場面での受動態の選択とは、Brutus の「知ること」に対する態度の変容と解釈できる。すなわち、ものごとの「本来の意味」を知るには、物事があるがままに受け入れなければならない。あるがままに受け入れるには、受け身となることが肝心である。受け身になることで、“I know” という能動的主張では見出せなかったものが認識できるようになる。

「知ること」の何たるかを知ったとき、Brutus は己の最期を自覚し、“I know my hour is come.” (5.5.20) と自死の決意を示す。

#### 4. 結

ここまで *Julius Caesar* における「知ること」についての議論を、“know” の用法を中心に論じてきた。“Know” のようなありふれた語が、劇中人物の「知ること」への態度、ものごとの本質に向き合う態度を描き出し、彼らの生きざまの問題をも浮き彫りにすることに驚きを禁じ得ない。知らないのに「知っている」と主張せざるにいられない心の弱さ、「知ること」から遠ざかる愚かさ、知るべきでないことを知ったゆえの苦しみなどが、動詞 “know” の語形の選択、反復、または、主語の人称の選択などによって、描き出されている。

さて、*Julius Caesar* における「本来の意味」の探求は、Brutus を無知の知へと導いた。彼が到達した「知ること」についての理解は、次の Hamlet の台詞に通じるものである。

There is a special providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; if it be not now, yet it will come—the readiness is all. Since no man of aught he leaves knows, what is't to leave betimes? Let be.  
(*Hamlet* 5.2.192-96)

この台詞について、Robert G. Hunter (124) は、最終的に Hamlet が向き合うことになるのは

「何も理解していないこと」であると論じる。「わからない」という理由で死を恐れた Hamlet も、次第に、「知らない」ことについての無知も「知っている」ことについての無知も変わりないことを受け入れていく。Brutus は、無知の知を認識し、ものごとをあるがままに受け入れることを学び、最終的に己の最期を知る。この Brutus の理解は、Hamlet によって、確実なのは死すべき運命<sup>8)</sup>のみ、死期さえも知ることはできないという認識へと発展していく。Julius Caesar における「本来の意味」への探求は、Hamlet へと続く、人間の認知についての探求なのである。

註

- 1) 日本語訳は小田島雄志訳を参考にした。
- 2) Zander (11-12) 参照。
- 3) 数量分析には *Editions and Adaptations of Shakespeare: A Full-Text Database of Major Historical Editions and Theatre Adaptations of the Works of William Shakespeare* を使用した。
- 4) Chernaik (80) 参照。
- 5) *Julius Caesar* における “fear” の使用も、高い頻度を示す。*The First Folio* では、“feare” 646 例のうち、30 例以上ある作品は *Macbeth* 36 例、*Cymbeline* 31 例である。それに *Julius Caesar* の 29 例、*Richard III* の 26 例が続く。これに “fear” 67 例中の *Macbeth* 1 例、*Cymbeline* 3 例、*Julius Caesar* 2 例を加えると、*Julius Caesar* における “fear” の使用は、3 番目の高頻度であることがわかる。
- 6) Caesar の言語は、説得的ではなく、断定的・独断的かつ遂行的 (performative) である (Baines 142)。彼の言語の断定的な調子は、自己への三人称での言及によっても強化される (Armstrong 146-47)。
- 7) *Julius Caesar* において、受動態の “known” の用例は 2 例のみである。もう一例は、Cassius が、Caesar 暗殺が露見したかと動揺した場面の、“If this be known / Cassius or Caesar never shall turn back,” (3.1.20-21) である。他に、否定の “unknown” も 2 例使用されている。
- 8) Doran (61-62) は、この台詞で “death” という語が語られないことを指摘し、Hamlet が到達した真実とは、死を受け入れる「覚悟 (readiness)」であると論じる。

引用文献

- Armstrong, Philip. *Shakespeare's Visual Regime: Tragedy, Psychoanalysis and the Gaze*. Houndmills and New York: Palgrave, 2000.
- Baines, Barbara J. “That every like is not the same”: The Vicissitudes of Language in *Julius Caesar*. Ed. Horst Zander. *Julius Caesar: New Critical Essays*. New York and

- Oxon: Routledge, 2005.
- Barton, Anne and John Kerrigan, eds. *Editions and Adaptations of Shakespeare: A Full-Text Database of Major Historical Editions and Theatre Adaptations of the Works of William Shakespeare*. Cambridge: Chadwyck-Healey Ltd., 1995.
- Chernaik, Warren. *The Myth of Rome in Shakespeare and his Contemporaries*. Cambridge and New York: Cambridge University Press, 2011.
- Doran, Madeleine. *Shakespeare's Dramatic Language*. Madison and London: The University of Wisconsin Press, 1976.
- Hunter, G. Robert. *Shakespeare and the Mystery of God's Judgments*. Athens: The University of Georgia Press, 1976.
- Levinson, Stephen C. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Massachusetts: Massachusetts Institute of Technology, 2000.
- Shakespeare, William. *Hamlet, Prince of Denmark: Updated Edition*. Ed. Philip Edwards. Cambridge and New York: Cambridge University Press, 2003.
- Shakespeare, William. *Julius Caesar: Updated Edition*. Ed. M. Spevack. Cambridge and New York: Cambridge University Press, 2003.
- Zander, Horst. *Julius Caesar: New Critical Essays*. New York and Oxon: Routledge, 2005.
- シェイクスピア, ウィリアム. 『ジュリアス・シーザー』 小田島雄志訳, 白水社, 1983.